午前霊時の用心棒

伝次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

午前霊時の用心棒

【Nコード】

N2982Q

【作者名】

伝次郎

【あらすじ】

空室だった203号室に、ヤクザの組長が入居してきた。組長の命を守ろうと、若い衆が動き出す。そして、友人、一也がヤクザに拉致された。組長の命を狙う人間を探す若い衆と、久しぶりに出てきた可愛い幽霊が、俺、坂藤啓介を窮地に追い詰める……。

その一（前書き）

この物語は、「午前霊時シリーズ」第二弾です。この「用心棒」から先に読むと分かり辛いかもしれませんが、できれば、第一弾「午前霊時の夢物語」を先に読んでいただけたら、人物設定や背景など、理解しやすいと思います。どうぞ第一弾から読んでいただきますようお願いいたします。

その一

(一)

玄関の呼び鈴がやかましい。

二日酔いの頭には、わずかな物音さえも、まるで爆弾が落下したかのように聞こえてしまうのだ。

いくら俺が二十四歳の若者だからって、飲みすぎたら歳がいくつになっても同じだ。

「せっかくの休みだというのに……」

布団にもぐりこんだ俺は、「もう少し寝かせてくれ！」

と、聞こえるはずもない来客人に、ボソボソと言っていたのだった。

今日は日曜日。しかしお昼をとづくに過ぎている。

夕べは調子に乗って、少々飲み過ぎたようだ。でも、たまにはいいだろう。何とんでも同棲中の愛する恋人、二歳年下の有里子の誕生日だったんだから。

友人たちを大勢集め、盛大に、厳かに　ただバカ騒ぎしたただけだが　時間を忘れ、延々とパーティーが繰り広げられていたのだ。行きつけのショットバーを出たときは、すでに朝日の指先が、地平線に見え隠れしていたのである。

まだ呼び鈴は鳴り続けている。いい加減に諦めて帰らないかな……。

古びたマンションである。どうせ新聞か何かの勧誘だろう。

「有里子、ちょっと出て、断ってきてくれ」

と、隣で寝ているはずの恋人に、俺は言った。「有里子　おい

！」

返事がない。トイレか？

しばらく待ってみたが、有里子が現われる気配はない。

仕方なく、俺はベッドに起き上がった。そして テーブルの上にある手紙に目が止まった。

また呼び鈴が鳴って、

「はいはい！ ちょっと待って」

と言つて、俺はその手紙を手にとって見ると……。

おはよう！

田舎のお母さんから、お父さんが倒れたからすぐ帰って来て、って電話があったの。しばらく実家に帰ります。

何度も起こしたのに、全く返事をしてくれないんだから。この酔っ払い！

いつ帰れるか分からないけど、いい子にしてるんだよ！

有里子

全くもう！ 久しぶりに休みが一緒だから、前から行きたがっていた遊園地に行くはずだったのに。

だったらもっと早く起きればいいのだが、俺の身体は正直なのである。

ベッドから出ると、冬の寒さが身にしみる。

そう、もうすぐクリスマスなのだ……。

「どちらさんですか？」

ドアにへばり付いて、俺は言った。

「あのう……。ちょっと開けてください」

「訪問販売はお断りです。ボーナスも少なかったんだから」

と言つても、来客人には関係ない。

「今日、203号室に引越して来まして、ご挨拶に伺ったんですが……」

そういえば、ここのことろずっと空いていた部屋に、新しい入居者が入つてくると管理人さんから聞いていたっけ。

わざわざ挨拶に来るとは、今どき珍しく礼儀を知っている奴らしい。

何かと世話になるかもしれない。こちらからも挨拶しておかな

くは。

ちよつと待って、と言って服を調べると、俺はゆつくりとドアを開けた。

「初めまして、柳田長次郎と申します。いろいろ迷惑をかけると思いますが、どうかよろしくお付き合いのほどを」

と、五十代と思われる男が、にっこり笑いながら頭を下げたのはよかつたのだが……。

俺は一瞬息を呑む。なぜなら、そこに立っている男が、見るからにあちらの人　つまり、ヤクザ屋さん風だったからである。

短く刈った髪はまだいいが、額から頬に伸びた傷跡。目つきはただ者ではない鋭い眼光である。ブレザーの下はほとんど下着姿と言っている。そして極めつけは、今では流行っていないと思われる茶色の腹巻を巻いているのだ。首から下げているお守りをのぞかせて……。

「これ、気持ちばかりですが……」

と言って、男は挨拶のしるしであるう、菓子箱を差し出した。

「そんな……気持ちばかりを、いやはや……とんでもない……ありがとつござる！」

と、俺はわけが分からない。

包みを受け取るうとしたとき、男の手が共に持ち上がって　見えてしまった。

そう、男の左手の小指が、きれいさっぱりなくなっていたのだ……。

(二)

「やばいよ、それ。事務所にでもなつたらどうするんだ」

坂藤一也が、珍しく自分で買ってきたボトルを開けて、俺に水割りを作ってくれた。

「事務所になるほどの広さはないよ。　　ありゃ、親分だね。いや、

会長クラスかもしれない。きっとプライベートの仮住まいじゃないのかな。女を連れ込むための」

と、俺は言ったものの、ヤクザの事務所がどういうものか、もちろん知っているわけではない。

「親分だったら、よけいにやばいんじゃないか？ 若い衆が控えているだろ」

「若い衆？」

「用心棒だよ。そういえば、入り口のところに怖そうなお兄さんが二、三人いたな」

「関係ないんじゃないの？ ここ、若い奴いっぱい入居してるし」

と、俺は呑気なもんだ。

「でも、用心しろよ」

一也は真剣な顔で、「関わりあえば、そのうち殺される。無視しても、因縁をつけられて殺される」

と、視線を泳がせながら、言ったのだった。

どっちにしても殺されるじゃないか！

そんなことはない。だって怖そうに見えても、意外と優しいかもしれない。それにまだ、本職のヤクザ屋さんと決まったわけではないのだ。

柳田長次郎が訪ねて来てから、俺は一步もこの部屋を出ていない。今日、昼過ぎの出来事でもあるし、二日酔いの身体ではどこにも出かけようがない。

ましてや有里子がいなくなったとなると、余計に虚脱感が押し寄せて来るのである。

不思議なことに、何か問題ごとがあると、いつも有里子の姿は消えてしまうのだ。

一也の奴、よく来てくれたよ。俺が心細い時って、やっぱり分かってるんだよな。変な奴だけど、さすが俺の親友だ。

しかし俺は、ちょっぴり心配になって来た。

一也が帰って来ない。足りなくなった酒を買ったために、部屋を出

てから三十分近く経とうとしている。

コンビニまで五分とかからない。事故というのも考えられないでもないが……。

いても立つてもいられなくなって、俺はマンションを飛び出した。まさかヤクザに……。

日付が変わろうとしている深夜である。人通りは少なく、野良犬さえも帰宅している(?) 時間だ。コンビニまで、人っ子一人くらいしか見当たらなかった。

帰ったのかな? 愛する恋人(といっても、金縛り中に出て来る幻覚ではあるが)のもとへ……。

俺がマンションまで帰って来ると、エレベータの前で、チンピラ風の男が数人、たむろしていた。

ビビッているわけではないが、面倒なことに関わりあいたくない。横の階段を上ろうとして、

「おい、兄ちゃん。ちょっと待ちな」

と、派手なジャンパーを着た男に呼び止められる。

「な、何か……」

「どこに行くんだ?」

「どこに、って 四階の自分の部屋に帰るんですけど」

「嘘じゃねえだろうな」

男が近づいて来て、俺の足下からゆっくりと視線でなめ上げる。

その迫力たるや……。

「本当ですよ! 何ですか、あなたたちは」

「だったら、お前の部屋まで連れて行け。間違いなければ見逃してやる」

見逃して、って、俺は何もしてないじゃないか!

仕方なく、男と共に四階までエレベーターで上がった。

すぐ前に、401号室のドアが見える。ちよつと出るつもりだったので、鍵は掛けていなかった。

薄くドアが開いていて、俺はノブに手をかけようとすると、

「待て。誰かいるのか」

と、俺のことを訝っている。

「いつもいるんだけど、今日は……」

と言いかけると……。

「お帰りなさい！」

女の声だ。「お客様？ 上がったもらっただら？」

有里子が帰って来たのか？

「何だよ。これか？」

と言って、男が小指を立てる。

「ええ、まあ……」

「ふん！ ま、よろしくやるんだな」

と吐き捨てて、男はそのままエレベータに乗り込んだ。

そして、閉まるうとしていているドアを押さえて、

「二階には絶対に行くな。命が惜しかったらな」

スルル、とドアが閉じると、吸い込まれるように降りて行く。ガラス窓で中が見えるようになっていて、ほりの深い男の目が、俺を睨みながら下降して行ったのだった。

ふうっ、と息をついて、初めて足が震えていることに気がついた。そりゃそうだろう。ケンカに自信がないわけではないが、あちらの人となると話は別。あとあと大変だ。

気を取り直した俺は、

「ただいま！」

と、元気よく部屋に飛び込んだ。

しかし 有里子の姿は見当たらない。それどころか、人がいた気配すら感じられなかった。

「あの声、もしかしたら……」

俺は部屋の中で、ただ一人、呆然と立ちすくんでいたのだった……。

マンションの前でたむろしていた男たちが、近くに停めてある黒

塗りの外車の周りに集まっている。

エレベーターから降りてきた男は、仲間たちに手を挙げて合図すると、その車の助手席に乗り込んだ。

「兄貴、どうでした？」

運転席から、少年のような男が振り向いて言った。

「ああ、別に問題はない」

と、男は言つて、「それよりテツ、組長から連絡はあったか？」

「いえ、まだ何も」

「そうか、まあ、これからだ。気を抜くんじゃねえぞ」

「分かりました」

若い血が燃え盛っているのか、「やるときは、一番に俺に行かせてください」

と、テツと呼ばれた男の目が血走っている。

それくらいでないか、この世界ではやって行けないのだろうか。

兄貴と呼ばれた小園裕次は、ロープで縛られて、後部座席に横たわっている男に目をやった。

「うまくやったな、あの男」

縛られた男の猿轡を取つて、「女連れ込んで、今ごろよろしくやつてるぞ。友達がこんな目に遭っているというのに」

と、ふふつと鼻で笑つた。

「こいつも、コンクリート詰めにして沈めますか」

テツはそう言いながら、楽しんでるようでもある。

「心配するな。沈めるのはお前が先だ」

裕次の言葉に、テツは身を縮めていたのだった。

「結局、関係ないとは思うが、こうなつた以上、しばらく付き合つてもらふしかなさそうだな」

と、裕次は言つた。「お前、名前は？」

「坂藤……一也……です」

「相棒の名前は？」

「西野啓介」

「何、悪いようにはせん。このマンションに住んでいたのが運の尽きだ」

「僕たちに、何をしろと……」

一也の顔が強張っている。それはこの車に拉致されたときのそれとは違っていた。

裕次が窓から顔を出して、マンションの二階を見上げている。

明かりの灯ったその部屋は、カーテンで閉ざされ、中の様子はうかがえない。

一瞬、人影が映ったと思ったら、照明が消され、真っ暗になった。

「やれやれ、やっとお休みか」

と、裕次が言って、一也に視線を戻す。「組長の命を狙っている奴がいる。あのマンションの中にな」

一也はただ黙って聞いていた。

「兄貴、言っていいんですか、そんなこと」

テツが心配そうに言った。

「俺たちより、住人の方が知っているはずだ。いい味方ができたじゃないか」

どういうことだろう。一也はこの住人ではない。友達のところに遊びに来ていただけなのだ。住人の顔など、知りもしないのである。と言ったところで、何の効果もないのだろう。

「しばらく付き合ってもらおうぞ」

裕次の低い声は、どうやらいやとは言わせてもらえないようだ。

「でも僕、早く帰らないと、お母さんが」

と言いかけて……。

「バン！」

テツが手で鉄砲の形を作ると、一也のおでこに指先を当てていたのである。

一也が失神していたのは、言うまでもない……。

その二

(三)

こんなに狭い部屋だとはな……。

もちろん知らなかったわけではないが、場所的に利便性はよく、贅沢など言っていない。しかも暴走族からスカウトして来て、十年以上も自分に身を投じてきた子分、小園裕次が「組長を守るために」と、わざわざ探して来てくれたのだ。

文句を言ったらかわいそうだ。

組が狙われている。繁華街の事務所では、あまりにも目に付きやすい。敵対している花岡組が、不穏な動きを見せているのだ。

こそこそした行動が嫌いな柳田長次郎である。しかしガラス張りをモットーとしていた組事務所では安心できない。暗雲漂う場所は避けなければならなかった。

入居してから、やっと二日目。

五階建てのこのマンション。まだ全部は挨拶回りしていない。

「今から行くの？ 世知辛い世の中、挨拶なんて時代遅れよ」

ベッドの中から、ルミが甘ったるい声で言った。

「そう言うな。仁義がなくなったら、日本も終わりだ」

「ほんとに古臭いんだから……」

203号室である。組長といえども、男として一人ではいられない。

愛人になったばかりのルミは、五十八歳の長次郎と、三十以上の年齢差を感じさせないほど、魅力的であり、大人でもあった。

挨拶は上の階から始めた。五階から廻って、昨日までに二階の住人に挨拶を済ませている。

後は一階だけだ。

「ちよつと行って来る」

と、長次郎が下着の上からブレザーを羽織った。

「早くしてよね。私の身体、また火が付いて来ちゃった」

ルミの白い身体が、シートからチラツとのぞいている。 昨日

から、一糸まとわぬ全裸のままだったのだ。

楽しみは後で……。

玄関を出た長次郎は、エレベーターで一階まで降りると、たまたま偶然帰って来た俺と鉢会ってしまった。

「おお、これは」

長次郎は親しみを込めて、「四階の 西野さん……でしたかな」

「ああ どうも」

と一礼して、俺はさっさとエレベーターのボタンを押した。むやみの話していると、またチンピラに絡まれそうだ。

「いかがでした、昨日の桜餅。田舎のお袋が、いつも送ってくれるんですよ」

と、長次郎は楽しそうに笑っている。

「桜餅……」

俺はちよつと考えて、「ああ、ありがとございました。美味しかったです」

と、まだ食べてもいないのに、そう言わざるを得ない。

「おふくろの唯一の楽しみでしてね。六十近くなっても、八十過ぎの母親にとっては、わしもまだまだ子供なんです」

長次郎の面持ちは、まるで童心に帰ったようでもある。

エレベーターがゆっくり降りて来た。

「いや、失礼。また送って来たら、すぐお届けしますよ。ぜひ皆さんに食べていただきたくてね。 というより、自慢なんです。おふくろの味がね」

「恐縮です。何もお返しできませんが……」

「いやいや、そんなもん」

かぶりを振って、長次郎は、「ほら、エレベーターが来てますよ。わしはこれから、挨拶回りがあるんで、失礼させていただきます」

と言って、きちんと頭を下げたのだった。

四階にたどり着いた俺は、自室のドアの前でしばらく突っ立っていた。

あの人、本当にヤクザ屋さんなのだろうか。昨日のチンピラとは関係ないのかもしれない。

格好は人波はずれてはいるが、人当たりの良さ、あの笑顔、そして親を思う人間としての心根。

昨日とは打って変わって、俺は自分に偏見があるのでは、とさえ思っていたのである。

でも、あの桜餅（まだ封を切ったわけではないが）、どこにやっただけ？

たしかテーブルの上に置いていたはずだが……。

部屋に入った俺は、自分の目を疑うことになった。それは、テーブルの上に、桜餅の葉っぱだけが散乱していたからだった。

もっとショックだったのが、有里子のバースデーパーティーの会場からこっそり持ってきた高級ブランドが、空になって転がっていたのである……。

せつかくの休みだというのに、どこにも行く場所がない。いや、ないわけではなく、相手がいないということだ。

有里子は突然、何も言わずに帰郷するし、悪友の一也は行方不明のまま。

幻の女（金縛り中の幻覚）にそんなに会いたいのなら、一言挨拶ぐらいして行行ってんだ！

今日、外出したといえば、昼飯を　　といっても夕方近くではあったが　コンビニに弁当を買いに行っただけだ。

その帰りに、柳田長次郎に会ったのである。

散らかっていた部屋を片付けた俺は、シャワーを浴びて、静かな時間をぼんやりと過ごしていた。

一人の夜……。飲むしかない。

何と空しいことだ　と、ウトウトしていると……。

「元気出しなさいよ。男でしょ！」

と、女の声。

眠りかけていた俺は、目を開けた。

正面に、茶髪で薄化粧、おまけにピアスまでした若い女が座っている。

よく見ると……。

「　　やっぱりお前か」

俺は驚きもせず、「真冬だぞ。出て来る時期、間違えたんじゃないのか？」

と、分かっていたと言わんばかりに言葉が出ていた。

「何よ、お化けみたいに言っつて！」

「お化けだよ、お前は。幽霊なんかじゃない」

「失礼ね。幽霊をバカにしてるんでしょ！」

「違う、誤解していただけだ」

「ここは四階よ。（五階）じゃないわ」

と、女はおどけている。

「ええと……。望美、っていったか？　お前の名前」

「よく憶えてたわね。そう、倉田望美。　　久しぶりね。　　といって

も、あたしはずっとあなたのこと見てたけどね」

と言っつて、望美はにっこり微笑んだ。もちろん、大好きなビールを片手に持つて……。

いつのことだったろう。一也の金縛りの話を聞いた後、望美が突然、この部屋に現われたのだ。金縛り中の幻覚ではないという。俺には信じられなかったが、あくまでも幽霊だと言い張っていた。実際に目の前で消えたり、肌の感触がなかったりと、幽霊としての存在感を（？）アピールしていたものだ。

しかし女心は分かっていたようで、行方不明になっていた有里子が帰って来るのと入れ違いに、すっかりその姿を消していたのだっ

た。

確か、二十一歳と言っていたような……。

「お前、桜餅、食ったろう」

残っていた葉っぱを、俺はテーブルの上に乗せた。

「あら、ごめんなさい。だって啓介さん、甘いもの苦手でしょ」

「幽霊ともなると、俺の好みまで分かるのか」

「幽霊だからじゃなくて、あたしは……」

と言っ、望美はうつむいた。

しばらくの沈黙があつて、俺は口を開いた。

「昨日、この部屋から声をかけたの、お前だろ」

「やっぱり分かった？ 有里子さんだと思つたでしょ」

「ということは、すべて知っているわけだ」

「そうね。 203号室の柳田長次郎。ただの人じゃない」

望美の目つきが変わつた。

「そんなこと分かつてる。ヤクザ屋さんだよな」

「でもね、それだけじゃないわ」

と言いながら、望美はまだ封を切っていない洋酒を手にしていた。

どうやら何か問題があると、酒を飲まずにはいられないらしい。

「それだけじゃない、つて？」

「親分だもの彼を守るために、子分たちが動いてる。それが何か、

気になるのよね……」

そう言いながら、グラスに落ちていったブランデーを一気に飲み

干したのだった。

ふう、と溜息をついた望美は、しばらく考えてから声を漏らす。

「有里子さん、いつ帰って来るのかな」

「急にどうしたんだよ」

「だって久しぶりに会えたんだもん。あたしがあなたに会える時間

つて、限られてる。邪魔しちゃいけないからね……」

望美は下を向いたままだ。

そういえば、前に出てきたとき、「好きな人ができた」と言っ

いたような気がする。人間に恋をすると、幽霊の身体に血が通う、と……。

不思議な時間が通り過ぎた。

「どうやらあたしの出番のようね」

と、顔を上げて望美が言った。

「何かあるのか？」

「それは分からない。でも、何となく、ね」

「お前を呼びたいとき、どうすればいいんだよ。携帯とか持ってないのか？」

「あたしは幽霊よ」

「じゃあ、仏壇の鐘を鳴らしたら、すぐ出て来てくれ」

と、俺は半分本気で言った。

「いい加減にしないと怒るわよ！」

と、ふくれっ面になったが、すぐ笑顔に戻る。

望美と俺。おかしなコンビの復活なのか……。

(四)

マンションに近い木造のアパートの一室に、十人近い男たちがたむろしている。全くむさ苦しい……。

でも仕方ない。組長を小さなマンションに匿い、手下である小園裕次がホテル住まいなどするわけにはいかないのだ。

花岡組の動きが慌ただしくなっている。繁華街にあった柳田組の事務所が、もぬけの殻になってしまったのだ。小さなトラブルをきっかけに、抗争事件へと発展しかけているところに……。

二階部屋の窓枠に手をかけて、裕次はイライラしながら外を見ていた。

「テツ！ ちょっと来い」

テツは裕次がスカウトして来た十九歳の少年である。

繁華街を歩いていたとき、十人以上はいると思われる暴走族の集団と、ただ一人でやり合っていたのである。勝ち負け如何は別として、その根性は見上げたものだ。

傷だらけになっても笑っているテツに、裕次は声をかけたのだ。た……。

「どうした。テツはいないのか」

部屋の中を見回して、裕次は怒鳴るように言葉を発していた。

「ま……まだ来てません」

玄関口で見張りをしている下っ端の男が、そう言いながら、顔は引きつっている。

裕次の命令に背けばどうなるか、組の連中で知らない者はいない。

「どこに行った」

「花岡組に張り付いているはずですが」

「もういいと言ったはずだ」

と裕次は、「あの野郎、まさか裏切ろうと」と、言いかけたときだった。

錆び付いた階段を駆け上がって来る足音がして、

「すんません！」

テツが転がるようにその部屋に飛び込んで来た。「兄貴、すんません！」

その部屋にいる男たちの視線が集中した。

「どうした。まさか、しつぽを見せたんじゃないだろうな」

テツの胸倉を？みながら、裕次は低い声で言った。

といつても、テツを痛めつけようというのではない。その姿から想像できることを、裕次は聞きたかっただけなのである。

「突然……襲われて……」

喘いでいるせいか、テツの言葉はままならない。

「誰にやられた」

「たぶん、花岡組だと……」

テツは何とか声を出した。

裕次の動作が止まった。しばらくの沈黙があつて、それからテツをせんべい布団に寝かせた。

テツの顔は腫れ上がって、着ている服も血まみれになっていたのである。

部屋の隅で見ていた坂藤一也は、全身から血の気が引いて行くのを感じていたのだった……。

電話が鳴った。もちろん身を隠している以上、備え付けの電話ではない。

三日前に小園裕次から持たされたばかりの携帯電話が、リロリロと聞きなれない音を奏でている。

柳田長次郎が手を伸ばそうとすると、

「待って！」

と、珍しくルミの表情が硬くなった。「出ない方がいいわ」

「どうした。うちのもんしか番号は知らんはずだ。心配ない」

「うっん、いやな予感がする。だから」

とルミが言ったときには、長次郎の指は緑色のボタンを押ししていた。

受話器に耳を当てて、しばらく様子をうかがってみる。しかし何の反応もない。こちらから声を出すのは得策ではないだろう。

赤いボタンに指をかけようとして、

「もしもし、親分さん？」

と、か細い声が聞こえた。

長次郎はためらいながら耳に戻すと、

「返事しないでいいから、黙って聞いてて」

女の声だった。「あなたは狙われている。そこにいたら必ず殺されるわ。それも花岡組じゃなくて、身近な人からよ。早く逃げて」

誰だろう。聞いたことのない声だ。

長次郎とルミの視線が重なる。

「誰？」

と、ルミの唇が言った。

長次郎は指を口に当てる。

「もうすぐそこに男が来るわ。気をつけてね」

女の声が低くなって、「血の臭いがするの」

と言ったのだった……。

ほどなくして、ドアを小刻みに叩く音が聞こえる。単なるノックではなく、一定に刻まれたリズムのある音である。

要するに、仲間である事を表す暗号なのだ。

ドアスコープに目を寄せた長次郎は、一瞬ためらってから、ドアノックを外した。

ゆっくりとドアが開いて、男が一人、周りを気にしながら入ってきた。

「どうですか。何か変わったことは？」

「一人か？」

長次郎は通路にちよつと眼をやつてから、その男を招き入れる。

「若い奴らは外に待たせてあります」

「ちようどいい。お前に話があつたんだ」

「話……と申しますと」

「ま、とにかく上げれ」

といつても、1LDKの狭い部屋だ。玄関口を入れれば上がったも同然である。

ナイトガウンを軽くかけただけのルミの姿が、ベッドの上になまめかしく横たわっている。

裾からのぞいている白い太ももが、「邪魔しないで！」と叫んでいるようでもあつた。

ソファ―に腰を沈めた長次郎は、正面にその男を座らせた。

「ルミ、何か冷たいもの、もって来てやれ」

「はい。あなた、ブランデーが好きだつたわよね。ロックでいい？」

ルミはそう訊きながら、立ち上がつてキッチンへと歩いて行く。

男は軽く肯いただけだつた。

「どうだ、何か動きはあつたか」

と、長次郎は切り出した。

「ええ、それが」

小園裕次はためらいながら、「どうやら裏をかかれているようで

……」

と、下を向いた。

「しくじつたのか」

「はい。申し訳ありません」

と、裕次は言つて、「花岡組も事務所を移転して、我々を攪乱しようとしています。しかし、花岡がいるのはS町の古い事務所です。間違いありません」

「だったら何も問題ないじゃないか。誰か張り付いているんだろう」

「それが……テツに行かせたところ、事務所の近くで襲撃されまして」

裕次は床に土下座して、「すみません、私の不注意です！」
と、頭をカーペットに叩きつけたのだった。

それでもテツは、忠誠心があった。

殴る蹴るの暴行だけではない。本物のヤクザともなると、武器をちらつかせながら、足腰も立たなくなったテツの顔に、鋭い眼光を浴びせる。そして、

「お宅の親分さん、どこにいらっしゃるんですか？」

と、低い声で、敬語を使って詰問してくる。

言葉の裏に、拒否したときの自分の姿が見えてくるのである。

相手が持っている短刀は、いきなり心臓を貫いたりはしない。しかし、テツが発する言葉によって、二十歳にもなっていないその身体に少しずつ傷をつけていくのである。

結局、血みどろになるまで、テツは歯を食いしばっていたのだった……。

「まさか、死んじやいないだろうな」

と、長次郎は言った。

「命に別状はありません。ただ」

と、裕次は言いよどんだ。

「ただ、何だ」

「どうも怪しい部分がありまして。あの野郎、花岡組に買収されているんじゃないかと思ってるんです。何となくですが……」

と、裕次は身を乗り出して、長次郎の耳元で囁いていたのだった……。

裕次は近況報告などを兼ねて、酒を酌み交わしながら、この世界に導いてくれた恩義ある組長との会話を楽しんでいた。

長居は無用だ。いつ花岡組が襲ってくるか分からない。

203号室を辞した裕次は、見送りに来てくれた長次郎に、エレベーターの前で言った。

「組長、無理しないで下さい」

「何のことだ？」

「あまり使い過ぎると、身体に悪いですから」

と言つて、裕次は腰を叩いた。

「馬鹿やろう！ 若い者に負けられるか」

「でも、腹上死、なんてことになったら」

「ルミだけでは物足らん。あと一人ぐらい……」

と、長次郎は言いかけて、

「エヘン！」

裕次の咳払い、ドアの隙間からのぞく、ルミの視線を感じていたのである。

「たとえ襲われても、決して無理しないように」

と釘を刺して、裕次はエレベーターに乗り込んだのだった。

そして、降りて行く箱の中で、

「ほんとに女好きなんだから……」

と、呟いていた。

「ごめんね、ルミちゃん」

そう言いながら部屋に入って行く長次郎の姿が、エレベーターの中から見えるようでもあった……。

その四

(五)

デコレーションケーキにロウソクを灯し、静かな夜が始まった。BGMはグレンミラー。ジャズバージョンのクリスマスソングだ。室内の照明は消され、オーディオデジタル表示盤のほのかな明かりと、ファンヒーターの風に揺られて幽玄な影を映し出すロウソクの炎。

二枚目の俺にふさわしいシチュエーションだ。ソファアに座った俺の胸に、有里子はその身を委ねている。右手にはワイングラスを持って、左の腕にはあどけない顔が埋まっていた。

有里子がそっと顔を上げる。そして優しく微笑むと、ゆっくりと目を閉じた。

映画スターになったような気分で、俺は唇を寄せて……。

ドタン！

マンションの俺の部屋に、大きな音が響いた。ソファアから転落した俺の頭が、思いつきり床にぶつかっていたのである。

そう、夢を見ていただけだったのだ。

今日はクリスマス・イブである。

有里子と、二人っきりのホワイトクリスマスを楽しむはずだった。昨日、有里子から電話があったものの、まだしばらく帰れないらしい。しかし男として、「帰って来てくれ」とは言えないものだ。予約しておいたケーキが、テーブルの上に申し訳なさそうに座っている。

仕方ない。ローソクだけでも灯すか……。

部屋の照明を落として、にっこり微笑んでいるサンタクロースの

頭に、俺はライターで火を点けた。

ボワツと明るく点灯したローソクの炎は、すぐに落ち着いてほのかな灯火となる。

その光を浴びて、俺の正面に見えたものは。

「メリークリスマス！」

で……出た！ 幽霊 と言ったら悪いような気もするが 望美がニコニコ笑っている。

どこから持ってきて来たのか、シャンパングラスには小さな泡を立てた透明な液体が注がれていた。

「男一人で淋しいわね」

と、茶化すように望美は言った。

「大きなお世話。出るなら『今から出るよ』って前もって連絡できないのか」

「そんなに怒らなくてもいいでしょ。オナラじゃないんだからね、あたし」

「似たようなもんじゃないか、すぐ消えるんだから」

と、俺はソファアに座り直しながら言った。

「 あつたまに来た！」

望美は立ち上がって、「せっかく出て来てあげたのに、もういい、あたし帰る」

と言って歩き出す。

帰るって、どこに帰るんだろう。と、そんなことを考える余裕はない。

「待てよ、冗談だよ」

追いかけて行った俺は、望美の腕を？もつとして 俺の手は、その身体を素通りしてしまう。

やっぱりこいつは幽霊だ。

「どうしたんだよ。そんなに怒らなくても 俺がそう言いかけると、」

「忘れてた！」

望美は振り返って、「冷蔵庫にワインが入ってるでしょ。クリスマスだから、あれは飲まなくちゃね」

と、部屋の中へ取って返す。そんなの、冷蔵庫の中にあっただっけ？ 呆気にとられていると、さっさとワインを取り出し、テーブルの上にセットしていたのだった……。

「お前さつき、『出て来てあげた』、って言ったよな」

いつ買って来たのか記憶にないワインを半分ほど空けて、やっと俺は口を開いた。

「そうよ、出て来てあげたの」

「恩着せがましい、つてのは、訳があるんだろう」

「そうね……そうかもしれない。だってあなた、心配でしょ、203号室の親分さん。それに」

「そう、あいつがいなくなって……」

と俺が言ったのは、このマンションに来て以来、坂藤一也の行方が分からなくなっていたことだった。

ヤクザのことはもちろん気になっている。

柳田長次郎が入居してから、マンションの周りを見るからに危ない男たちが頻繁に出入りしているのだ。一般市民にとって、こんなに迷惑なことはない。

だからといって、マンションの住人に迷惑をかけることは、今のところなかった。

「あたし、見てきちゃった」

と、ほんのり頬を染めて、望美は言った。

「見て来た、って まさか」

「そう、203号室のこと。気をつけた方がいいわよ。近いうちに殺人事件が起きるかもしれないから」

「殺人事件？ 勘弁してくれよ……」

「勘弁できないわね。だってあなたも巻き込まれるんだから」

重大発言なのに、望美は呑気な顔をして、ワイングラスに口をつけている。

「それ、どういうことだよ」

「一也さんが巻き込まれてる。助けてあげないと、あいつらに殺されるわ」

望美の表情が、初めて硬くなった。

小園裕次に拉致されて、仮事務所になっている木造アパートに一也がいること。花岡組と柳田組とのいさかい。そして、小園裕次と長次郎が話していた内容など、望美は俺に話したのである。

俺はしばらく黙っていた。

話したくないからではない。その状況を、すぐに判断することができなかつたからだ。

望美は立ち上がると、空になったワインのボトルを取り上げて、「ごちそうさま！ これ、返してくるね」

と言った。「実はこれ、203号室から失敬してきたの」

所詮こいつは幽霊だ。俺が殺されたとしても、「仲間ができた」くらいにしか思わないのかもしれない。

ふらつく足で（現代の幽霊には足があるのか？）、望美は玄関ではなく、壁の中に消えていったのだった……。

どんぶりの中から、インスタントラーメンの白い湯気が立ち上っている。

腹は減っているが、食べようにも箸がなければどうすることもできない。

まさか手で喰えつてんじゃないだろうな。

勘弁してくれよ。そうでなくても怖いお兄さんたちに囲まれて、配給されたサンドイッチさえ食べられなかったのだ。我慢するにも限度がある。

部屋の隅で、坂藤一也はどんぶりを睨みつけていると……。

「ごめんよ。箸がなかったら食べねえもんな」

と言って、家庭用の使い古した箸が差し出された。

「食べてもいいんですか」

「当たり前だろ。食わなきゃ体がもたねえよ」

「ありがとうございます。それじゃ」

一也は、受け取った箸に麵をからめてすくい上げた。半熟にされた卵を崩さないように……。

空になったどんぶりが、目の前に二つ、重ねられている。

意外な親切ではあったが、一也はまだ心を許したわけではなかった。

協力しろと言われてから、まだ何の動きもない。町の中を車で رفتたり来たりしたかと思えば、まるで我慢大会でもしているかのよう、狭いアパートの部屋で男たちがじっとしているのである。

一体、いつまで続くのだろう……。

「一也　さん、っていったっけ」

一緒にラーメンを食べていた男が、ためらいながらそう言った。

「ええ、そうです」

見るからに年下だが、相手が相手なだけに、やはり敬語を使ってしまう。

「ごめんな。俺、料理って苦手なんだよ。旨くなかっただろ」

「そんなことはありませんよ」

と、一也は言った。「それより、傷、大丈夫ですか？」

「ああ、何てことねえよ。こんなの怪我のうちに入らない」

と、テツは言ったが、足を組み替えようとして、「あててっ！」「つい、包帯の巻かれた右足に手をやっている。」

和也の腹を満たしたラーメンは、テツが作ってくれたものだった。「あなたには悪いと思ってるよ。無理やり連れてきてさ。でも、マンションから出て来るタイミングが良すぎたんだ」

テツはそう言ったが、一也にとってはタイミングが悪すぎたとしてもか言いようがない。

「これからどうなるんですか、俺」

もうここに何日いるだろう。何が起きているのか、何がどう動いているのか、一也にはさっぱり分からなかった。

もちろん、自分がここにいる理由さえ分からないのである。

「さつき出て行った裕次さん。あの人、柳田組長の後を継ぐことになってるんだ」

テツは包帯を巻き換えながら言った。「その組長が今、花岡組に狙われている。殺されちまったら裕次さんの天下だ。でも、そういうわけには行かない。なんとと言ってもメンツがあるし、組長は裕次さんの恩義ある人だ。何としても守らなきゃいけない」

「メンツ……ですか」

「でも、それだけじゃない。俺たちもやっぱり人間なんだよな」

と言って、テツの表情に笑みが浮かんだ。「俺、てつきり花岡組の奴らにやられたと思ってたんだ」

「違うんですか？」

「ああ、違うね」

と、テツは断言した。

裕次との話では、花岡組にやられたと言っていた。それが違うと言うのなら、一体誰がテツを襲ったのだろう。

いや、そんなことはどうでもいい。所詮、一也には関係のないことだ。

「あんた、かたぎでよかったよ」

テツは一也を見て、「ま、時には危ない目に遭うかもしれないけど……。自分を信じてりゃいいんだもんな」

と、何やら寂しそうでもある。

「自分を信じないで、人を信じることなんかできない。違いますか？」

「俺たちの世界では、自分を殺さなきゃいけないときがある。もちろん精神的にも、肉体的にも」

「ごめんなさい。僕には分かりません」

と、一也は素直に言った。「でも……だったら、やめたらいいじゃないですか。かたぎの方がいいに決まっています。命を懸けてまでそんな危ない世界を」

「恩義がある」

テツは遮った。「俺がこの世界にいるのは、義理人情のかけらもない人間たちに愛想を尽かしたからさ。たとえ何があっても、自分を殺してさえも、信じた人には命を懸ける」

テツの言葉は、その世界の構造を怖いほど物語っているようでもある。

映画の中でしか知らないヤクザの世界。しかし一也は、本物の男を見たような気がしないわけでもなかった。

テツは遠くを見つめていた。

「太陽が、二つになってしまった……」

その言葉の意味は分からなかったが、一也には何となく、テツの存在が、楽しくも、哀れにも思えたのだった……。

その五

(六)

古いビルの一室。

照明を消し去った暗い部屋のカーテンが、少しだけめくれていた。そこから見える風景は、何の変哲もない住宅街である。真夜中だからといって、夜景を楽しむようなロマンチックな場所ではない。ただ少し離れたところに、あのマンションが、打ち上げ寸前のロケットのごとく、爆発をこらえるようにたたずんでいた。

双眼鏡から見たその建物は、ほとんどの住人が寝静まっているであろう。部屋の明かりが灯っているのはわずかだ。

「どうだ。変わったことはないか」
椅子に座ったまま、窓に張り付いているテツに裕次は小声で訊いた。

「はい、今のところは」
レンズを拡大させて、203号室に照準を合わせる。

柳田長次郎が潜んでいるその部屋は、明かりは点いているもの、わずかな隙間を残してカーテンが引かれている。

「上はどうだ」

「ええ、なにも……」

双眼鏡をずらすと、401号室がレンズに浮かぶ。西野啓介つまり俺が住んでいる部屋も、まだ明るかった。

しかし、やはりカーテンは引かれたままだ。

「あの男、何か言ってたか」
と、裕次は言った。

男とは、車の中に待たせてある、坂藤一也のことだ。

「いえ、何も言いません。ただ」

と、テツはためらった。「裕次さんの推測どおり、西野啓介は花岡組の回し者かもしれません」

「そうだろう。今日辺り、奴は動くはずだ」

「というと、組長の寝込みを……」

「たぶんな。その前に、俺が奴を黙らせてやる」

そして、目を離すんじゃないぞ、と釘を刺して、裕次はその部屋を出たのだった。

外に出てちよつと歩いた裕次は、あるビルへと入って行った。

エレベータに乗って、八階建ての最上階のボタンを押した。

狭い箱が上昇すると、ドアが開いて、暗い廊下へと降り立つ。

目の前の階段を上がれば、屋上に出るはずだ。

裕次はゆっくりと上り始めた。

俺の喜びがどれほどのものか、誰にも分からないだろう。

いや、分からなくていい。これは俺の、俺だけの嬉しさなんだから。

こんな夜中だというのに、有里子から電話があったのである。俺を喜ばせようと 有里子ももちろん喜んではいたが 明日までは待てなかったという。

帰って来る。有里子が帰って来るのだ。

倒れた父の病状も回復し、今日、めでたく退院したということだった。そして、明日の夜には帰って来るからね、と、いつものかわいいい声が受話器から聞こえて来たのである。

「結婚したら、有里子の里で暮らしてもいいかな……」

何てことを考えながら、相好を崩した俺は、有里子の声を惜しみながら、電話を切った。

と、何やら視線を感じる。

望美か？ あいつ、幽霊のくせにやきもちを焼いているのかもしれない。

でも、仕方ない。望美は幽霊であって、俺が愛しているのは有里

子だ。

それに、たとえ俺が望美を選んだとしても、どうにもなることではない。

と思いつながらも、望美の姿を探してしまう。しかしどこにも見当たらない。

まさか台所で、キッチンドリナー……。

俺が立ち上がるうとしたとき、また携帯のベルが鳴った。

有里子何か言い忘れて、またかけて来たのかもしれない。二回目ベルが鳴る前に、俺はボタンを押していた。

「西野さんですか？」

男の声だ。「夜分に申し訳ありません。お休み中だったんでしゅう」

「いえ、まだ起きてますが……どなたですか？」

しばらく合間があつてから、

「坂藤一也という男、知ってますよね」

と、ぶっきらぼうに訊いて来た。

「坂藤は僕の友達ですが。それが何か」

「彼を、助けたいと思いませんか」

「は？」

「あなたが行かないと、彼は殺されます」

淡々とした口調だけに、俺は言葉の意味が読み取れない。それよりも、こんな夜中に電話をかけてきた男に対しての憤りの方が先だった。

一也がいなくなつてかなりの日数がたっているのも事実である。

しかし、たまたま忙しくて、連絡して来なかっただけかもしれない。いくら友達だからって、毎日連絡して来る必要なんてないのだから。

でも、殺される？

そういえば、あいつがいなくなったのはあの日、危ないヤクザ屋さんが入居してきたときからだ……。

「あの……、おたく、誰なんですか？」

「203号室に、暴力団の組長がいるでしょう。坂藤君は、その組長を殺しに行くんですよ。花岡組の刺客としてね」

「ちよつと待てよ。あいつはヤクザなんかじゃないぞ。それに」
それに、人を殺す度胸なんてないはずだ。

「早くしないと、返り討ちにあつてしまう。組長は待っているんだから。自分の命を狙う男をね」

俺は黙って聞いていた。もう、答える言葉はない。
しかし男は続けた。

「何か聞こえませんか？二階辺りで」

と、男が言ったときだった。

ガラスが砕ける音が聞こえた。そう遠くはない。おそらくこのマンションの中だろう。

「どうしたんですか。まさか……」

「どうやら始まったようです。君の友達はせっかちらしい」
男の声を最後まで聞いただろうか。

誰もいなくなった俺の部屋。

床に転がった携帯から、男の薄い笑い声が聞こえていた……。

ギギツ、というドアの開く音がして、テツは双眼鏡から目を離した。
た。

「どうだ、動きはあったか」

裕次の声は、相変わらず低くて、重く感じる。

やっと帰って来た。こんな大事なときなのに、テツは一人で心細かったのである。

「どこに行ってたんですか」

というテツの問いには答えず、裕次は窓際に近づいてカーテンを少しめくった。

203号室の明かりが消えている。

「暗くなってるじゃないか。どうしたんだ？」

「ついさつき、突然消えました」

「もうおやすみか。今ごろ女と、天国にでも行ってるんだらう」と、裕次は言った。

今の内に楽しむがいい。どうせもうすぐ、地獄を見ることになるのだから。

唇を歪ませながら、裕次は心の中で呟いていたのだった。

「それが……」

テツが何かためらっている。

「どうした。まさか出て行っただけじゃあるまい」

「誰か、客人がみえているようすで」

「客人？ そんなはずはない。ガードは固めてあるだらう。人が来たら連絡が入るはずだ」

「暗くなる前に、組長がカーテンを開けたんです。そしたら」

もちろん危険な立場であるだけに、カーテンを全開したわけではない。ほんの少し、空気を入れ替えるつもりで、窓を開けたのである。ろっ。

そのとき、ライトに照らされて、ベッドに横になったルミの姿が見えた。酔っているのか、うっとりとした目で組長を見つめている。

「早く来てよ」

とでも言っているのだらう。ルミの口が動くと、組長は振り返って肯いていた。

でも、あれは誰だ？ ベッドの横のソファに腰掛けて、組長が大事にしている高級ブランデーをがぶ飲みしている女がいる。

髪の毛長い若い女だ。いつの間に来たのか、何の連絡もなければ、双眼鏡をのぞいていたテツでさえ気が付かなかったのである。

しかし組長は、その女には目もくれず、ベッドに入って明かりを消してしまったのだった。

二人の女を相手にしようとは……。

「そんなバカな！ そんなはずはない」

裕次の顔色が変わった。「それじゃ、計画が……」

「どうしたんですか？ 敵じゃないから、大丈夫なんじゃ
しばらく考えていた裕次は、

「テツ、来い！」

と言つて、部屋を飛び出したのだった。

「何、今の音」

長次郎の腕の中で、ルミが言った。

玄関の外 マンションの通路辺りでガラスが碎ける激しい音が
聞こえたのである。

「しっ、静かにしてる」

長次郎はゆつくりとベッドから起き上がった。

「どこに行くの？」

「ちよつと様子を見て来る」

「待つて、行かないで。まさか花岡組が来たんじゃ……」

覚悟はしていたものの、いざそのときが来ると、やはり平常心で
はいられない。

ずり落ちるようにベッドから降りたルミは、隠れているつもりな
のか、分厚い布団に包まって今にも泣き出しそうである。 玄関の
ドアスコープに、長次郎は目を寄せた。

「ん？ あの男、確か四階に住んでいるここの住人では……」

暗くなった階段の踊り場から、顔だけのぞかせてこつちを見てい
る男がレンズに浮かんだ。

暗くなっているのは、通路の照明がことごとく割られていたの
である。

非常灯に浮かんだ男とは そう、坂藤一也のことを聞いて飛ん
で来た、西野啓介こと、俺だったのである。

用心しながら、長次郎はドアを開けて、

「どうしました？ このガラス、まさかあなたがやったのではある
まい」

と、小声で言った。

「いえ、あのう……。友達が迷ってるんじゃないかと思って
電話で聞いたことを、そのまま正直には言えない。」

「こっちに来なさい。そこにいたら危ない」

長次郎は手招きした。

そう言われても、ヤクザ屋さんの親分だ。そう簡単には近寄れな
い。

すると……。長次郎の真後ろで、望美が呑気な顔をしておどけて
いる。そして、

「大丈夫よ。このおじさん、ほんとはいい人なんだから」

と、通路に響き渡る声で言ったのだった。

「おい、お前！」

俺は指までさして、「そんなところで何してるんだ！」
と、思わず言ってしまった。

「しっ！ あたしの声、あなたにしか聞こえてないのよ」
と言われても、もう遅い。

「いや、わしはただ、君の身を案じて言ったままでが……」
長次郎は、不思議そうな顔をしている。

「もう、ほんとにドジなんだから」

望美は呆れて、とつと部屋の中に入って行く。

「ごめんなさい！ 俺、寝ぼけてて……」
他にどんな言い訳ができるだろう。

殺されるんじゃないか、と思っていると、

「若いということは素晴らしい！」

長次郎は笑顔だ。「さあ、早く入りなさい。君に迷惑をかけたくな
いからな」

俺の肩を抱いて、部屋の中へと導いていったのである。

長次郎の顔が優しく見えたのはどういうことだろう。怖いはずな
のに いや、怖かったのに、まるで俺を歓迎するかのような微笑
だ。

散らばったガラスを避けながら、俺は203号室へと足を踏み入

れた。

その六

(七)

固唾を呑む。 。
という言葉は、こんなときに使うものだ、改めて述べる余裕はない。

マンションの前で小園裕次が口にした言葉は、ある程度予測はしていたものの、いざとなると緊張という言葉以上に、怯んでしまうのだ。

テツは逆らうことなく、視線を落としたまま聞いていた。

「分かったか。 今しかない」

誰も返事はしない。 いや、できるはずもなかった。
しばらくためらってから、

「でも、兄貴……。 本当にうまくいくんですか？」

マンションを見上げながら、テツは小さな声で言った。

「ああ、心配するな。 ルミも俺たちの仲間だ。 手はずは整っている」

「ということは、西野啓介が組長を殺る……。 それを黙って見てろ、と」

「そうすれば、組長を殺したのは花岡組ということになる。 報

復はしねえとな」

「でも、それではスジが通らないんじゃない」

「そんなことは関係ない。 組長が死ねば、跡目は俺が継ぐ。 お

前は幹部だ」

裕次は嗤っていた。「どうだ、嬉しいだろう」

そう、最初から仕組んであったのだ。

花岡組との小競り合いは常のものである。 抗争、とまでは発展していないが、いずれ決着をつけなければいけないときが来る。

しかし、花岡組から仕掛けてくることは、実のところ、まだなかったのだ……。

「さあ、行くぞ。足音を立てるな」

裕次はそう言って、マンションに向かって歩き始めた。

「ちよつと待つてください」

裕次とテツの間に、若い衆が三人、控えている。その中の一人坂藤一也が、裕次を呼び止めた。

「どうした」

「啓介 頼まれたって、そんなことする奴じゃありません。何かの間違いじゃ」

「行ってみれば分かる。今ごろ組長の部屋にいるはずだ」

「ということは……」

と、テツが口を挟む。「もう確認済みなんですか」

「ああ、間違いない」

裕次はテツの耳に口を寄せて、「いいか、二階に上がったら、一気にドアを開ける」

と言った。

「でも……」

仲間から離れて、二人は壁際に寄った。

「分かってる。西野啓介は花岡組の人間じゃない」

「だったら、どうして組長を」

「俺がやる」

と、裕次は自信ありげだ。「死んじまったら誰にも分からない。」

西野啓介と坂藤一也がやったことにするんだ。だから あいつらもこれが最後。組長のお供をしてもらう」

つまり、小園裕次の内部クーデターだったのである。

一般市民を犠牲にしての……。

おそらく今ごろ、啓介は組長に匿われているだろう。

あのハゲオヤジ、バカがつくくらいお人よしなのだから。どうしてヤクザなんかになったんだろう。かたぎだったら、大企業の社長

になっていたかもしれないのに。

マンシヨンの正面玄関から若い衆を侵入させ、裕次とテツは、非常階段を静かに上って行った。

しかし、裕次には気になることがある。

「酒を飲んでいた女。一体誰だ？」

煙草の煙を吐きながら、「邪魔にならなきゃいいが……」

と、裕次は呟いたのだった。

「ゴホン、ゴホン！」

煙を顔にもろに吹きかけられて、望美はむせ込んだ。裕次が階段を上がってきたときから背後に立っていたのだ。もちろん誰にもその姿は見えていないのだが。

望美が大のタバコ嫌いだということは、裕次に分かるはずもない。次に吐き出された煙が流れてきた時には、もう望美の姿はそこにはなかった。

「キヤッ！」

ベッドの下で、ルミが小さな悲鳴を上げた。

長次郎よりも先に、若い男が部屋に侵入して来たからだだった。

「あつ、ごめんなさい」

俺は慌てて、「すみません、ちょっとお邪魔します」

と、ためらいながら言った。

「ルミ、心配することはない。この方は大事なお客さんだ」
遅れてきた長次郎は、そう言ってルミを安心させた。

「お客さん？」

「そう、わたしたちを助けてくれる、守り神かもしれない」

「そういえば 確か、四階の……」

「西野です。ご機嫌うるわしゅう」

と、やはり俺の挨拶はわけが分からない。

緊張を通り越して、頭はすでにパニック状態なのだ。

「まあ、かけて下さい」

長次郎の言葉に甘えて、俺はソファ―に腰掛けた。

ルミの動きは素早かった。組長の顔を潰してはいけない。客人とあらば、丁重にもてなさなければならぬのだ。

スナツクのホステスよろしく、どこから持って来たのか、おしほりまで提供した。

「洋酒のいい奴があるだろう」

と、長次郎はルミに言つて、「水割り？ それとも若いからロツクの方がいいかな」

笑顔で俺に訊いた。

「ちよつと待つて。あなた、いつの間に飲んだの？」

カラになつた洋酒のビンを持つて、ルミは言つた。

「おや？ さつきまで残つていたはずだが……」

長次郎が頭をかしげている。

無理もない。ここに来てから、いつの間になくなつた酒が、これでもう、五本目になつていたのである……。

きつと望美のしわざに違いない。あいつ、ここに来てまで飲んでいたんだ。

あのアル中女！ 酒がないと生きていけないのか！

「残念でした。あたしはもう死んでるの！」

いつの間にか、望美が隣に座つている。「声を出したらダメよ。

あなたにしか見えていないんだから」

どうやら俺の心まで読んでいるらしい。

気がつかない振りをして、俺は黙つて座つていた。

しばらくして、長次郎は室内の明かりを消した。

部屋の中は真つ暗。とまではいかないにしても、ベッドのスタンドライトだけで、辺りはぼんやりとしているだけだ。

「どつしたんですか？」

と、俺は訊いた。

「しっ！ 黙つて！」

長次郎はそう言つて、ドアスコープに目をやっている。「まだか

……」

「一也が来るのか？ いや、そんなことがあるはずない。望美なら知っているかもしれない。俺は振り向いてみると俺に出された水割りを、望美は美味しそうに飲んでいたので……。」

「君に迷惑をかけて申しわけない」

俺の正面に腰掛けて、長次郎はゆっくりと話し始めた。「実は、わしの命を狙っている者がある。そやつが今日、襲撃して来るという情報が入ったんじゃない」

暗い部屋の中で、その声はまるで、おとぎ話でもしているように優しく聞こえる。その内容は恐ろしいものだというのに。

「知ってます。電話がありました」

「電話が？ 誰からですか？」

「分かりません。ただ、僕の友達が、何とか組」

「花岡組ですか」

「あ、そうそう、花岡さんに頼まれて、親分さんを殺しに行く……」

電話の内容を、俺は長次郎に話した。

「やっぱりそうか。これで間違いない」

と言って、長次郎の視線はベッドで横になっているルミに投げられた。

目が合って、その体が小さく震えたのを、長次郎は見逃さなかった。

「親分さん、嘘ですよ、そんなこと。一也はそんな奴じゃありません！」

「わしの命を狙っているのは、花岡組なんかじゃない。花岡源造はわしの幼なじみなんです。これは誰も知りませんがね。子分たちは心配しているようだが、奴とはちよくちよく酌み交わしているんですよ。昔話をしながらね」

「それじゃ、襲撃というのは……」

「情けない話だが。もうすぐ、わしの舎弟が来るはずです」

「親分さんを守るために、ですか？」

と、俺は訊いた。

すぐには答えない。いや、それどころか、長次郎は優しく微笑んだのである。

「あなたの命は、わしが守ります。この身を懸けてもね」

と言うと、長次郎の毛のない眉が、ピクツと動いた。

何やらドアの外で物音が……。

長次郎はドアに張り付いて、その目はドアスコープに。

何が起るんだらう。怖いことはいやだ。

望美、一体何が。

教えてもらおうと思って振り向いたのに、その姿はどこにもなかった。

その七

(八)

非常階段の出入り口から、二階に通じるドアを開けた裕次は、その光景を見てためらった。

まっすぐに延びたコンクリートの通路は、照明灯が割れて暗くなっている。

「どうしたんだ、これは……」

呆然としていると、テツが先に入っていく。

砕けたガラスを踏んで音がしてしまうので、通路の隅を気をつけながら進んだ。

エレベーターが開いて、若い衆が三人、降りて来た。一人はもちろん、一也である。

「何があつたんですか？」

やっとそこまでたどり着いた裕次に、まだ十八にもなつてなさそうな少年が訊いた。

「それはこっちの台詞だ。お前、何をした」

「俺はただ、裕次さんに言われた通り、ガラスを割っただけで……」

「こんなところでやったのか」

「いいえ、ちゃんと四階の踊り場で」

「じゃあ何だ、このざまは！」

裕次に睨まれて、少年はすみあがっている。

「兄貴、何のことですか、ガラス、つて？」

訝しげにテツが訊いた。

花岡組が襲つて来たと見せかけるために、派手な音がするようにガラスを割れ、と少年に命じてあったのだ。

間違はなく、西野啓介は部屋を出たはずだ。そしてこの階まで降

りて来ているだろう。

では、この照明は西野が……。

いや、そんなはずはない。暗くなったからといって、何の意味があるだろう。花岡組とは関係ない一般市民なのだ。

ということは、本当に花岡組が……。

それも考えられない。これまでの花岡組の襲撃事件は、裕次が勝手に作り上げたものだったからだ。

テツが襲われたのも、暴走族を雇って、裕次が仕組んだものなのである。

それもすべて、この日のために……。

「まあいい、後で話す」

裕次は舌打ちして、「踏み込むぞ。いいか」と、言った。

「大丈夫なんですか？ もし、中に花岡組がいたら……」

少年がそう言うと、

「いるかもしれん。だから、一気にやる」

裕次はポケットから203号室の合鍵を出して、少年に渡す。

そしてためらっている一也の肩を抱いて、

「お前も一緒に来い」

と、引き寄せた。そして、「これを持ってろ」

と、硬くて重い、塊を握らせた。

初めてではないにしても、一也にはそれが、拳銃だということは分かる。

震える一也の後ろから、テツが身構えた。

長次郎の表情が、一瞬変わった。そしてゆっくり立ち上がる。

「何か、音がしませんでした？」

ドアの外から物音が聞こえて、俺は小さな声でそう言った。

「しっ！ 君はここにいなさい」

「でも、誰か入って来たら」

「そこは玄関の正面だ。奴がドアを開けたら、君の姿が見えるだろう」

「じゃ、僕が殺されるんじゃない……」

「奴が狙っているのは、このわしだ。心配はいらん」

長次郎はそう言つて、部屋の奥へ行つた。

そしてすぐ歸つて来ると、俺の前に立ちはだかったのである。

手に握られているのは。

白木の鞘から抜かれた刀が、ベッドのスタンドライトの照明を受けて、キラリと光つた。

日本刀である……。

「待つて！」

ベッドの脇から、ルミが飛び出して来た。

「向こうに行つてろ。あいつらも、女までは殺しはしない」

「そうじゃなくて」

「この青年を死なせるわけにはいかん。わしが守る」

長次郎が、俺を見た。そのいかつい顔が、優しく微笑んでいる。

まるでこの世に怖いものは何もないとでもいうように……。

「やめて！ あなたが殺されるわ！」

「殺されて結構！」

と、長次郎は一喝した。「わしも歳だ。そろそろ裕次に任せんな」

「その裕次さんが」

「分かつとる！」

と、長次郎は言つた。「うん、分かつとる」

自分に言い聞かせるように、長次郎は何度もそう呟いたのだった。突然、玄関のドアが開いた。

真つ先に見えたのは、長次郎が初めて見る若い男だった。

「一也！」

と、俺は思わず叫んだ。

一也が俺を見て、何か言いかけたとき。

突き飛ばされたのだらう。部屋の中に、一也は勢いよく転がって来たのだった。

ちよんちよん、と肩を突かれて、テツは振り返った。

いつの間にか、若い女が立っている。

「知ってたんでしょ、こうなること」

「誰だ、お前！」

「あたしはあなたの仲間。無駄な『死』って、好きじゃないのよね。女は酔っているのか、頬を紅潮させている。」

「そういえば、正面のビルから双眼鏡の中に見えた、あの女ではないか？ 組長を尻目に、酒をがぶ飲みしていた……。」

裕次は神経を集中させているせいか、何も気がついていないらしい。やはり望美の声は聞こえていないのだろう。

「本当にそれでいいの？ 親分さんが殺されるの、黙って見てていいの？」

テツは黙って聞いていた。「今までお世話になってたくせに！」

親分さんの小指がないのも、あなたの失敗の責任を取ってくれたからじゃなかったの？ それでもあなた、男といえるかしら！」

「分かつてる 分かつてるよ」

と、テツは肯いた。

指をつめたとき、組長は何も言わず笑っていた。自分も指を、とテツが言っても、将来があるからと、断固として阻止してくれたのである。

恩義がないはずがない。命を投げ出したって惜しくないのだ……。

ドアが開いた。

と同時に、一也は突き飛ばされて、その手に握らされていた黒い拳銃が、長次郎の足下に転がってきた。

「組長」

と、裕次は懐に手を入れて言った。

時間が止まった。

誰もが一瞬、動きを止める。まるでその異様な空気を拒否するかのよう。

「お前だったのか……」

長次郎が、構えていた日本刀をゆっくり下ろす。

「すみません、こんな夜中に」

「何だ、この若者は」

「花岡組の鉄砲玉です。組長の命を狙っていたんです。そこにいるぼうずと組んで」

と、裕次は俺を指差した。

「だから、違うって言うてるじゃないですか！ 僕たちはヤクザなんかじゃない」

俺はそう叫んだ。

「うるせえ！ だったら、どうしてこんな物を持ってるんだ。オモチャじゃねえだろう」

と言つて、長次郎の足下に落ちている拳銃に手を伸ばそうとして

長次郎の足が、その拳銃を部屋の隅に蹴りつけた。

裕次の表情が曇る。

冷静に　と思いながらも、真冬だというのに、額には汗が浮かんでいた。

「危ねえだろう、あんなもん」

長次郎の表情は変わらない。

「それ、さつきこの人に」

一也が言いかけて　その腹に、裕次の靴がめり込んだ。

苦痛にのたうちまわる一也を、俺は黙って見ていることしかできない。

「お前は花岡組の人間だ。いい加減にしねえと」

裕次はこぶしを固めて殴りつける。

「やめろ。無駄な暴力はよせ」

長次郎は刀を鞘に納めながら、「やるなら、一気に逝かせて

やれ」

と、静かに言った。

「ご苦労だったな」

裕次は懐から拳銃を抜いた。「成仏してくれ」

ゆっくりと一也の額に銃口が近づく……。

こうなることは分かっていた。長次郎も、テツも、予測していた通りだ。そして、これから起こる事だって……。

拳銃を持った裕次の手が、引き金を引く寸前、すっと上がった。

銃口が、長次郎を睨んだのである。

後ろにいたせいか、テツの判断が遅れた。しかしそれでも、身体は鋭く反応する。

俺は、まるでスローモーションの画面を見ているような気がした。テツが飛び掛る寸前、裕次の指に力が入る。激しい音と共に弾が飛び出して……。

「うっ！」

と呻いて、長次郎の顔が歪んだ。そして、右腕を押さえている。

不思議な光景だった。発砲の瞬間、望美が火を噴いた拳銃を握ったのである。

その八

「あつ！」

声を出したのは、俺だけではなかった。テツが裕次の腕に絡みつきながら、短く声を発していた。

「何やってんだ！ 一気にやれと言っただろう！」

長次郎が叫んだ。「一発で仕留められないのか、情けない」

裕次は外したつもりはなかった。至近距離だし、たとえ離れていても目標を逸らすような腕前ではないのだ。

「こんな半人前の男に、わしの後を任せていいのか？」

長次郎は嘆きながら、「わしの教え方が悪かったかな」

と、なぜか笑っている。

「さあ、早くやれ。後はお前に任せる」

俺たちに迷惑をかけたくないのだろう。壁際によつて、長次郎はゆっくりと座った。

「組長、すみません！」

と、裕次は言った。「こうするしかなかったんです。俺、頭悪いですから」

「敵に首を取られるより、いい死に方だ」

「すみません。この世界のしきりですから」

「テツ、邪魔するな。わしは最初っから裕次に任せるつもりだったんだから」

長次郎はテツを見て、静かに肯いた。

そう、知っていたんだ、何もかも。

しかしテツにとつて、長次郎の反応は意外だった。

もし裕次が背いたら、その場で取り押さえて指をつめさせる、と言っていたのだ。俺や一也が無関係の人間だということは、最初っから分かっていた。だから、裕次の拳銃から発された弾丸だって、

余裕で避けられるはずだったのではないだろうか。

しかし、裕次に任せる……。

本当にそれでいいのか？ 黙座する男を殺せるというのか？

裕次が再び拳銃を突き出す。もう外すことはない。しくじったら、それこそ組長を侮辱することになる。

長次郎が目を閉じる。そして 裕次の指が動いた。

「組長！」

裕次に飛び掛る余裕はない。壁際に寄った長次郎の方が近かったのだ。

鋭い銃声と共に、とつさに飛び込んだテツが、長次郎に覆いかぶさるように倒れたのである。

「テツ！」

長次郎は抱き起こしながら、「バカやろう！ この間抜けが！」と、裕次を見て大声で怒鳴った。

テツを抱えようとした長次郎の手に、べっとりとした血が絡みついている。その背中に、弾丸は食い込んでいたのである。

「組長…… 大丈夫、ですか」

腕の中で、テツの声は小さかった。

「何てことだ……。お前はこれからの人間じゃないか」

「良かった……。間に合ったんだ」

しばらく目を閉じて、呼吸を整えているのだろう。大きく息をついたテツは、

「兄貴、まだ早いっすよ。俺が言うのもなんだけど、組長には長生きしてもらわなくちゃ。ヤクザ、つたつて、本当の義理人情を知ってるのは、組長 柳田長次郎さんだけです」

二人は黙って聞いていた。二人だけじゃない。俺も一也も、それから何も知らずに従って来た若い衆も、ただテツの言葉を聞いていることしかできなかった。

うっ！ とテツが呻いた。

「テツ、しっかりしろ！」

長次郎が抱き寄せた。

「組長……お願いが……あります」

「何だ？」

「兄貴を……許してやってください。ヤクザは誰だって野望があります。たまたまそれが失敗しただけですから」

「お前の命を奪ってまでも、か？」

「俺だって、いつか同じことをやってたはずです」

テツは裕次を見て、「兄貴、すみません。順序が逆になっちゃって……」

と言つて、へへつと笑っていたのだつた。

もう時間がない。あと数分で死んでしまうのだろう。組長の顔も、兄貴の顔も、しだいにぼやけて来ている。怖いヤクザだつて、こうやって見ると可愛いものだ。

薄れて行く意識の中で、テツはこの世に未練はなかったか、と薄く目を開ける。

すると、女がテツの顔を覗き込んでいた。

ああ、さっきの、あの女だ。

「よくやったわ。あなたつて、本当に男ね」

「お前だつてすげえ女だよ。火を噴いた拳銃、握るなんて」

「あなた、後悔してない？」

「後悔？　どうか……。でも今さら遅いだろ」

「そうね……そうかもしれない」

望美はテツの手を取つて、「でも、あなたのおかげで、これからの柳田組は大きくなって行くわ。親分さんと裕次さんの、二人の力で」

と、微笑みながら言った。

「どうしてそんなこと分かるんだよ」

と、テツは訊いた。

「それはね」

望美はテツの手を引いた。「とにかくおいでよ。教えてあげるか

「不思議だった。まるで怪我なんかしていないように、テツは起き上がったのである。」

「さ、行きましょー！」

暗い道を、望美に導かれながらテツは歩いていた。ずっと遠くに、明るい光が見える。

「もうすぐよ。さあ、頑張つて」

テツは、光を目指して歩いていったのだった……。

(九)

一也が帰って来ない。

コンビニに買出しに行つて、もう三十分近く経とうとしていた。

まさか、また拉致されたのでは……。

「大丈夫よ。一度帰つて来たけど、また行つたみたい」

いつの間にか、望美が俺のとなりに座っていた。

「忘れ物か？」

「お酒の量が足りなかったから、もっと買ってくるように暗示をかけたの」

と言つて、望美は舌を出した。

不思議な女だ。いや、おかしな幽霊だ、ということ。

しかし 望美がいたからこそ、無事にこの日を迎えることができたようなものだ。感謝しなくては……。

柳田組は、もうこのマンションにはいない。夜明けと共に、きれいさっぱり引き上げて行つたのである。

その後どうなったのかつて？ 俺は知らないよ。気になるんだつたら、望美に訊いてくれ。

でも、テツのことは忘れられない。

一也が言っていたが、拉致されていたときから、男のロマンを語っていたらしい。そしてかたぎの人間には手を出さない、と一也を

守ってくれていたのだった。

恩義ある人のために命を投げ出す。それがロマンの終着ではないだろう。しかし、男としてのテツが、自らの道を選んだのかもかもしれない。

そう思うしかないじゃないか。

でも、通路の照明は誰が割ったのだろう。裕次の命令で、俺をおびき出すためにガラスを割ったのは、四階の踊り場だったはずだが……。

「あれはあたしよ」

と、望美が言った。「だって、足音が聞こえるじゃない。相手が誰だって、心の準備が必要でしょ」「と、至って呑気である。

冷静に考えればそうかもしれない。

ここは401号室。つまり俺の部屋だ。

今日は日曜日ということもあって、日が暮れる前からパーティーの準備に取り掛かっていたのである。

何のパーティー？ おいおい、それを訊いてくれるなよ。今日は何でたい（？）クリスマスじゃないか。

しかも、やっ和有里子が帰って来る。

準備はすっかり出来上がって、あとは客人を待つだけだ。ソファに落ち着いて、俺と一也の回顧録である。

「監禁されて、寂しかっただろ」

「やっと帰って来た一也に、俺は言った。」

「そんなことないよ。これがさあ」
「一也は小指を立てて、「どこにいても、俺に会いに来てくれるんだよね」

と、笑っている。

所詮、金縛り中の幻なのだ。一也の笑顔を見て、俺はゾツとしたのだった。

「木造アパートでおしっこ漏らしたの、誰だったかしら」

俺の横で、缶ビールを手にした望美が言った。

こいつ、いつの間にか飲んでるぞ。

でもいいや。望美がいたから、すべて解決したようなものだから……。

一也には分からないように、俺はそつとウインクした。

望美はというと、チロツと舌を出して「あつかんべー」のご挨拶。

俺はおかしくて、笑いをこらえるのが大変だった。

玄関の呼び鈴が鳴った。

「ほら、帰って来たぞ。愛しい有里子ちゃんのお帰りだ」

と言つて、一也が立ち上がった。

「お前が迎えるのか？」

「ちよつとトイレ。しばらく出て来れないから、よろしくな」

要するに、気を遣ってくれているのである。

二度目の呼び鈴が鳴つて、俺はやつと立ち上がった。

玄関を開けるのが楽しみでもあつて……。

「待つて！」

望美が追つて来る。「あたしが開ける」

「ちよつと待てよ。やばいだろ、それ」

「どうして？ あたしの姿、有里子さんにも見えないかもしれない

じゃない」

「でも……」

望美つて、そんなに意地悪な女だったのか？

また呼び鈴が鳴る。しかも連打だ。

ノブにかかった望美の手を、俺は握った。

温かい。　　そういえば、幽霊が人を愛したとき、その身体に血

が通う、と以前、望美は言っていた。

「あたし、決心した！」

望美は毅然として、「有里子さんから、あなたを奪ってみせる！」

と、断言するように言った。

チャラチャラという音が聞こえる。いつまでもドアが開かないの

で、有里子が合鍵を取り出ししているのだ。

「望美ちゃん、お願い！」

「なあに？」

「今日のために、高い赤ワインを買ってあるんだ」

「だから？」

「絶対に飲みません。大事に取っとくから、今日のところは……」

おそらく、情けない表情をしているのだろう。俺の顔。

「いつ飲めばいいの？ 次に有里子さんがいなくなるの、いつ？」

望美が腕をからめて来た。「こそこそするのって、ほんととは嫌いなんだよね」

鍵穴にキーを差し込む鈍い音。

望美の唇が、俺の口に絡みついた。

カチツ、と音がして、ゆっくりとドアが開いて行く。

甘い唇の味に陶酔しながらも、俺の身体は反比例。

「 ただいま」

有里子が突入 ではない、帰って来た。

「おか おかえり！」

それしか言う事はない。

「どうしたの？」

キョトンとして、「一人で踊りの練習？」

と、有里子は言った。

「うん……まあ……」

西野啓介流の舞を、俺は踊っていたのだった。

いや、望美流とでもいうべきだろうか……。

おわり

その八（後書き）

最後まで読んでいただきまして、ありがとうございました。

次回第3弾は、「午前靈時の子守唄」を予定しています。有里子が主役の物語です。そして、望美と有里子と啓介の三人が同時に登場するシーンも出てきます。奇妙な三角関係はどうなるのでしょうか。是非お読み下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2982q/>

午前靈時の用心棒

2011年2月3日15時25分発行